

善人・悪人

——法律家の人間観——

前 沢 忠 成

皆さま方が、毎日、新聞をお読みになる、ラジオをお聴きになる、またテレビをごらんになりますと、強盗であるとか、殺人であるとか、ひったくりであるとか、詐欺であるとかいう報道を、ごらんになったり、聞いたり、なさらない日はないと思います。そして、ずいぶん悪い人があるものだと感ぜられることでしょう。これらは、みな、悪人といえはいえる人たちであります。そして世の中には、悪人が大へん多いという感じをお持ちになることと思います。一方、善人のほうはどうかと申しますと、よいことをしたことは、悪いことに比べて、報道されることが非常に少ないのであります。これはよいことをするのがあたりまえで、これに引きかえ悪いこと、特に犯罪は、世間の出来事の全体に比べてみますと、例外であって、非常に率は少ないのであります。また世間全体のためにも、どこにどういう強盗が入ったとか、どんな詐欺が流行しているとか、というようなことは、国民のみなさんに知っていただきたいほうがいいところから報道されるわけでありませう。

ただいま申し上げた善人とか悪人とか申しますのは、両方の極端に属するもので、私どもの属する、その両極端の

中間にある人たち、おそらくこれは国民全体の九九・九九パーセントまではこういう方々だと思えますが、こういう方はもちろん悪人ではない、しかしまた、善人であると特に取り上げて報道されるような方でもない、きわめて普通であり、平凡な方であります。これらの方をやっぱり善人であると、その部類に入れば入れられないことはないのではありませんが、私は、ここでは、両方の極端だけを対比して取り上げてみたいと思えます。

私は四十年近く裁判官を勤めまして、先頃定年で退官いたしましたものでありますが、裁判所で調べを受けて、刑に処せられる人たち、この人たちは、悪人であるといつてよろしいかと思えます。少なくとも、その犯罪を実行している時には、悪魔のようなものです。しかしながら、そういう人たちが、警察や検察庁の調べを受けて、裁判所へ起訴されてくる、裁判官が裁判所でゆっくり調べてみますと、純度九九パーセントというような悪人、つまり人間といえないというような人は、犯罪者の中でもきわめて少ないのであります。

長い間裁判官生活をいたしましたのが、たった一人、私が直接担当したものではありませんが、傍聴をいたしました、そのきわめて稀な例外に当たると思われる事件がありました。この事件は、強盗殺人の事件で、物取りに入って必ずその家にいる人全部を殺してしまう、しかも殺害の仕方が残忍きわまる、法廷では全部その犯行を認めているのですが、こういうことを言うのです。

「殺された人たちは、みんな殺されるような運命に生まれてきたのだ、私は殺すような運命に生まれてきたのだから仕方がない」と平然と言い放って落ち着いているのです。悪いことをしたとか、殺された人たちに気の毒なことをしたとかいう気持ちは全然持っていないのです。良心というものは一かけらも持っていないのです。これは人ではありません。

当時、私はまだ裁判官になる前でありまして、見習と申しますか司法官試補の時代でありましたが、友人と傍聴をしております、この徹底した犯人に驚いた、というよりも、恐ろしくなったのであります。

もちろん、この被告人は死刑に処せられましたがおそらく死の間際まで平然としていたことでしょう。不幸な人で、気の毒なことであります。このたった一つの例外を別として、あとは、どの被告人でも、八〇パーセント、九〇パーセントの悪い心を持っていても、残りの二〇パーセントとか一〇パーセントとかは正しい、美しい心を持っているのです。ただ犯罪を犯すときに悪があばれ出して、善が働くことができなくなり、悪魔のようになってしまふ、後に落ち着いて冷静になると、自分は何であのような犯罪を犯してしまったのだろうか、反省し後悔するのであります。つまりよい心が活動して、悪の心に立ち向かうわけです。

ここでまた、私も自身、また国民の大部分の方のことを考えてみたいと思いますが、よく考えてみますと、人間の心の働きほど不思議なものはありません。あの善良な人があんなことをしたか、どうしたのだろうかと驚かされることは、私も経験したことがございますし、また皆さま方も、そういう経験をなさったこともおありかと思えます。そのたびごとに、私もは、自分もよく反省して心を磨かなければならない、と自分を戒めるのです。つまり自分の心の中には、もし油断をして放任しておけば、あばれ出して、とんでもないことをしでかさないとは限らない、悪の部分がないとは申せません。あるお医者さんの話であります、年をとった胃腸病の方が、そのお医者さんに、徹底的に手術でもして、治したいということ相談された。ところが、そのお医者さんは診断の上、この病気は別に放っておいても命に別条はないが、あまり過激なことをすると、かえって命にかかわる。むしろ自分の病気を大事に、あばれないようにして、栄養をとり、運動でもしたほうがいだろうということをお申された。私は非常に感心いたしました。

のであります。人間の場合、性格の悪い部分を外科手術で取るということではできません。先ほどのお医者さまのお話と同じように、善の部分を育てて、悪の面を押さえてしまう、こういう心がけが必要ではないかと思うのであります。

いまから三百年余り前、十七世紀のフランスにパスカルという有名な物理学者、哲学者、数学者がありました。たいへんにすぐれた天才で、この人の著わした「パンセ」という本があります。パスカルの瞑想録として、わが国にもたくさん訳が出ておりますが、その中でパスカルは、「人間は天使にもあらず、野獣でもない」ということを申しております。その意味は、人間は天使のように完全に善ばかりの人もいないし、野獣のように理性も良心もない悪魔はいない。人間はすべてその中間で、心の中にはよい部分も、悪い部分も、両方を持っているものだという意味であろうと私は理解いたしております。パスカルは有名な「人間は考える葦である」ということを言った哲学者であります。こういう考え方はパスカルだけが考え出したことではなく、西ヨーロッパの思想を支配するヨーロッパの教養の基盤となっているキリスト教の信仰を持った多くの人たちの考え方でもあると思います。

さらにこのことは、日本でも同じような考え方をした人があったようでもあります。パスカルよりも百年あとに生まれ、のちに国学の祖といわれた本居宣長も、ある本の中で「悪人というものも、全く無用の存在とはいえない。悪人があればこそ、善人とはどういうものかはっきりするのである」ということを申して居ります。宣長の言うところの底には、自分は善人と思って、怠けて油断をしてはいけない、常に悪人を見て反省し、自分の心を清く正しく保たねばならないということ、われわれにさとしてくれている。つまり人間の心に、善の面も、悪の面もあるという考えを、宣長は持っていたのではないのでしょうか。

私の家は仏教徒で、浄土真宗であります。と申しても、別に信心深いわけでもなく、両親の法事をしたり、ある

いは命日におまいりをするだけで、特に仏教も研究したわけではありませんが、親鸞上人の有名な本に、「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という言葉があります。つまり善人ですら往生をとげるのであるから、悪人はなおさら救われるという、非常に深い意味の言葉であります。この言葉の蔭には、私がただいま申し述べましたパスカルの考え方が、やっぱりそこにはあるのではないか、一脈相通するものがあるのではないかということを考えるのであります。親鸞はパスカルよりもずっと古い、十二世紀から十三世紀にかけての偉大な上人であります。以上、パスカルのことは、私の大学時代の恩師で、卒業後も今日までいろいろ教えていただいております田中耕太郎先生から直接、あるいは、その御著書によって教えられたものであります。また宣長のことにつきましては、私の尊敬する大先輩のお話で承ったことで、偉大な先哲の、人間に対する見方に、私は強く動かされ、勇気づけられ、人間でありながら人間を裁くという、裁判官のむずかしい仕事を続けてくることができたのであります。

そこで、この悪い面を押さえて、いい面を伸ばすためには、どうしたらよろしいか。これは非常にむずかしい問題でありまして、結局は宗教の力をかりなければならぬということが申せると思います。ただ私は宗教の専門家でもなし、哲学の専門家でもありませんので、きわめてあたりまえな、平凡な、長いこと裁判をしてきた国民の一人として、以上のように感ずるものであります。

大勢の人が一緒に暮らす、その大勢の中には、前に申し上げました善人もおれば悪人もおる、それから善人でも悪人でもない、その中間に位する人たちも大勢おります。しかもそれらの人たちが、それぞれ心の中には善人の部分も持っておれば、また悪人の面も持っておる、こういう人たちが秩序立って生活をするためには、どうしても規則が必要であります。そのために法律が設けられ、規則があり、また、それだけでなしに、道徳もあり、宗教もあります。

また、よい習慣というものにわれわれは規律されて、それに従って、私どもは円満な秩序立った生活ができるわけがあります。心の中の悪があげられないようにするにはどうしたらよいか。これはよい面を大いに育て、強くしなければなりません。そのためには宗教も必要であり、また教育も必要であり、これは自分だけではできないことで、友人であるとか、あるいは先生であるとか、あるいはまた親族の人たち、お互に全部の人が助け合ってそういう方向に戒め合っていくよりほかに、仕方がないのであります。

いまからもう六十年前ぐらいになりますが、日露戦争のあとで、講和条約というものが、アメリカのポーツマスで、日本とロシアの間にできました。ところが、国民のうちには、その講和条約に反対の人たちがありました。明治三十八年だったと思いますが、日比谷の焼打事件という騒ぎが起こったことがあります。

その焼打事件の当日、これは先輩からお話を聞いたのであります。ある裁判官が裁判所へ出勤する途中、風呂敷包に裁判の記録を包んで、日比谷公園へ差しかかると、大勢の人が、わいわい騒いでいる。どういふことかと思つて見ますと、向こうのほうで、お巡りさんが抜剣をして振り回している。大勢の人はそれを見て、また、わあわあと騒ぐ。その裁判官はうしろのほうから見ておったのであります。つい思わず持っていた風呂敷包を頭の上へ差し上げて、やれやれ、と一言云ったわけであり。ところが、そのすぐ近くに私服の警官がおりまして、つかまってしまう。調べてみると、裁判官であつて、裁判の記録を持って裁判所へ出かけるところであるということが分りまして、まあ勘弁してもらつて、法廷に間に合つたということ、その日比谷事件でもって拘留状などを出すために、日比谷公園のそばに出張しておつた先輩の方がお話をされたことがあります。

これなどは、私どもでも、ある程度の野次馬的な気持ちというのは心の中にだれしも持っているわけであり、

たまたま、群集心理と申しますか、その裁判官は、うっかりその野次馬精神を發揮してしまったわけであります。

終戦後、裁判所の制度も大きく変わりました、最高裁判所ができ、最高裁判所に付属して司法研修所という、裁判官、検察官、弁護士になる人たちを教育する機関が設けられました。私はその初代の所長を命ぜられました。昭和二十二年のことでした。司法試験に合格し、大学を卒業した人たちは、司法修習生として、ここで二年間勉強し、最後にまた試験があつて、合格すると任官し、または弁護士となることができます。

当時の修習生は、ほとんど全部応召から帰ってきた人で、服装も陸軍将校、海軍士官の制服を着た人が多かったのであります。戦場から空襲で壊滅した日本に帰ったばかりの人たちを、これから平和国家を建て直すために、大事な法曹の仕事をしてもらうのに、どうしたらよいか、まず第一に、法律に打ち込んで、勉強してもらわなければならぬ、これはもちろんのことです。同時に大切なことは、戦場で荒れた心をなごやかにし、常識のある円満な人柄を育てなければならぬ。法律のほうは、それぞれ有能な教官をお願いし、一般教養的なことは、所長みずからこれに当たることにいたしました。判事、検事、弁護士の仕事は、人と人の争いを審理して裁判をしたり、検察官として起訴をしたり、あるいは弁護士として犯罪を犯した人を弁護する、こういう仕事でありますから、何よりも人間性というものを知らなければならぬ。いろいろな人たちの人生、生き方の実態を把握、理解しなければならぬ。しかも人の心は複雑微妙であり、絶えず動いて変化しております。これを知るためには、すぐれた書物も読まなければならぬ。特に古今東西のすぐれた小説は、われわれに人生とは何か、人の心はどういうものかを教えてくれる大事な教科書であります。そのときに、私は、自分がいままでに読んで、自分の血となり肉となってくれた書物を推薦し、読むことをすすめましたが、同時に、書物を読むときに、拔萃とか解説、ダイジェストはよろしくない、原著そ

のものはじめからしまいまで読むということをしすすめたのであります。また一方において、音楽の専門家に来ていただいて、音楽をとくに鑑賞するということをいたしました。これは、すぐれた音楽に打たれるということとは、ただ心をなごやかにするだけでなしに、真理を探究する精神を旺盛にする、人の心を善に導いてくれるものだというのが、私の持論であったからであります。終戦直後のことであり、ステレオもLPもありませんでしたが、特に作っていただいて、そういうことを行なったのであります。

二年の終りに試験がある。その合格が決定しますと、送別会があって、所長も、教官も、全員が出席いたしますが、ある送別会の席で、数名の修習生が私の前に来まして、

「所長、われわれは所長にあだ名をつけているのですが、御承知ですか」

「いや知らないね、大体、僕は平凡な人間で特徴がないから、あだ名をつけるのはむずかしいだろう、何とつけたね」

「ホモ・ダイジェスト」

「うむ、なるほど」

と私は感心しました。「ホモ」はラテン語で人間ということであり、私があまり、人間を知れ、人間を勉強しろということを言うもので、また一方ではダイジェストはいけない、ほんもの全部にぶつかって行けということも申したもので、こういうあだ名をつけたものと見えますが、その時の人たちは、もう卒業しましてから二十年近くなり、裁判官の人も、検事になった人も、弁護士になった人も、それぞれ全国に散らばって、錚々たる中堅として活躍いたしております。

私は、ときどき自分につけてくれたこのあだ名を思い出し、これらの諸君も、あとから来る人たちの指導をしながら、いずれはあだ名をつけられるようになるだろう、そのときには、私と同じような「ホモ・ダイジェスト」というあだ名をつけられるように、私が繰り返し申した、人間は善ばかりではない、悪ばかりでもない、両方を持っている、これを知らなければいけない。知るのみならず、自分が悪というものを押さえ、善というものを伸ばして行くように心がけねばならないということを、あとの人に伝えてほしいと祈っているわけであります。

附記 以上は、NHK第一放送、昭和四十一年二月二十一日と二十三日「人生読本」の時間に、講述した原稿で、この放送の録音盤は、本学に所蔵されております。